

『精神を病むということ』

前松沢病院院長 秋元波留夫 著
東京大学教授 上田 敏

木村 敏／京都大学精神医学 医師

本書は、我が国の精神医学の最長老である秋元波留夫氏に、リハビリテーション医学の権威である上田敏氏が、精神医学の過去・現在・未来について質問し、秋元氏がこれに答えるという形式で書かれている。対談であるから非常に読みやすく、しかも要所要所では秋元氏が後から丹念に筆を入れて、学問的にも正確な内容が述べられている。

すでに4半世紀前に東京大学教授を定年退官された秋元氏が、その後も臨床の第一線に立って、精神医療、特にリハビリテーション精神医学の向上に努められただけでなく、何よりもまず、精神を病む患者とその家族に対する社会的偏見の除去に向けて現在もなお余人をもって代え難い貢献を続けておられることに、私は日ごろから深い感銘を受けている。この感銘は、本書を一読してますます強いものとなった。医学者としての最高の地位に在った著者が、80歳をはるかに過ぎた現在もなおもち続けておられる精神病患者の社会復帰へ向けてのこの若々しい情熱

は、世界的にみても決して多くの例をみないであろうところの、きわめて貴重なものと言わなくてはならない。

本書では、まず「精神の病気」をみるいくつかのみかたが紹介され、これらのみかたが西洋と日本の歴史の中でどのように変化し、現在われわれが親しんでいる「精神医学」の体系にまとめられていったかが述べられている。次に、著者自身が若いときに自から調査に当たったアイヌの「イム」を例にとって精神障害と文化との関係が語られ、同じく著者が先駆者となった「失行症」や「てんかん」の研究から、「脳の病気としての精神疾患」に話題が及ぶ。次に精神科薬理療法についての淵源と最新の知見が紹介された後、著者が特に情熱を傾けている精神科リハビリテーションの歴史と現状、ことに我が国でリハビリテーションが立ち遅れている状況が語られ、最後にこの深刻な欠陥を是正するための今後に向けての提言がなされている。

正直に言って、著者のもつ生物

学的な精神病観と、私の人間学的なみかたとは基本的に異なっているし、また著者の語る精神医学の歴史は、当然のことながらもっぱら著者自身の育った東京大学精神医学教室が、欧米から我が国に受け入れてきた精神医学の歴史に限られている。しかし、この立場が現在の世界の精神医学の主流を代表していることはまちがいないし、これが精神疾患の一面を理解する上で不可欠のみかたであることにも疑問の余地は無い。また、著者がもっとも力点を置いている精神病患者の社会活動の促進という一点に関しては、言うまでも無いことながら立場によって観点の相違など生ずるはずは無いだろう。卓越した精神医学者としての、そして行動的な精神科医としての秋元氏の見事な生きざまに対して、深い敬意と惜しめないエールを贈るとともに、本書が一人でも多くの人に読まれることを切望してやまない。

(A5判、326ページ、図4、写真34、定価4635円(税込)、送料300円、1990年、医学書院刊)